投稿

乳幼児をもつ女性保護者の育児ストレスの労働形態別にみた多母集団同時分析

池田（イケダ）　隆英（タカヒデ）*

目的　育児をめぐる事件は，注目されて久しく，今日もなお絶えない。その背景に育児ストレスとの関連が指摘されてきたが，従来の実証研究では要因分析が十分に行われていない。そこで，乳幼児をもつ女性保護者を対象にして，育児に関するアンケート調査を行った。本稿では，労働形態別に育児ストレスの要因分析を行うことで，子育て支援の課題を明らかにすることを目的とした。

方法　調査は，2007年11～12月，乳幼児をもつ保護者1,911名に調査票を配布して実施した。回収数1,219部，回収率63.8％，有効回答1,156部，有効回答率60.5％であった。本稿では女性保護者（ｎ＝1,125）を分析対象とした。質問項目のうち，気になる様子，子育て環境，自尊感情，子育て状況を独立変数，ストレス反応を従属変数に，重回帰による労働形態別の多母集団同時分析を行った。

結果　ストレス反応に対して，特に，気になる様子や自尊感情が，３つの労働形態に共通して有意な影響をもつ。また，子育て環境や子育て状況の一部の因子は，２つの労働形態あるいは１つの労働形態だけで，有意な影響をもつ。しかも，労働形態のすべてに共通する要因，フルタイムとパートあるいはパートと専業主婦に共通する要因，専業主婦に固有の要因があることがわかった。すなわち，賃労働を行うフルタイムやパートタイムの場合，「暴力の表出」をするほどストレス反応が現われやすい。フルタイムの労働ではないパートタイムや専業主婦の場合，子どもと離れた「１人の時間」がないほどストレス反応が現われやすい。賃労働を行っていない専業主婦の場合，社会的なサポートのある「良好な環境」がないほど，ストレス反応が現われやすい。

結論　育児ストレス反応に対する相対的影響は，労働形態と単純に対応しているわけではない。今後，育児ストレス反応の要因分析では，労働形態別の複雑な相対的影響を丹念に分析する必要がある。また，労働形態は経済階層や文化階層と関連が深いことから，育児ストレス反応が階層性と関連することを考慮して，より実態に即した子育て支援策が必要であると考えられる。

キーワード　乳幼児，女性保護者，育児ストレス，労働形態，育児行動，多母集団同時分析

Ⅰ　は　じ　め　に

本稿は，乳幼児の女性保護者を対象とする質問紙調査について，育児ストレス反応への労働形態別の相対的影響を分析した結果を報告する。

育児をめぐる事件が注目され始めたのは日本が高度経済成長期を過ぎた1960年代だが，今日もなお育児をめぐる事件は絶えない。かつては，乳児遺棄，子殺し，母子癒着，育児放棄などが，また近年では，子どもへの虐待，子どもの貧困などが，深刻な社会問題として注目されている。こうした事件が起こる度に育児ストレスが言及

＊岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科准教授

されるのは，養育者のストレスが育児のあり方に影響を与えている，という危機感がある[1)]。これは，子どもがかけがえのない存在であり，子育てが社会全体の大切な営みである，と多くの人びとが感じていることの現われでもある。社会保障に関する施策でも，育児関連の書籍や雑誌でも，育児は重要なテーマである。育児ストレスの把握やスクリーニング，子育てのニーズや支援，具体的な援助や対応，施策の展開の把握や評価まで，様々である。

こうした社会認識の形成に貢献してきたのが研究であるが，「育児ノイローゼ」「育児不安」「育児ストレス」など，研究者によって表現も定義も異なる。先行研究でも概念の厳密な規定がされておらず，本稿ではこれらを総称して「育児ストレス」と表現する。育児ストレス研究は，1970年代までは，子育ての問題は女性（母親）が原因であると考えられていた。だが，1980年代，こうした前提を問い直す実証研究が現れる。育児にまつわる母親のリアリティやアクチュアリティ，父親・男性の育児の意識や行動，家庭を取り巻く人間関係のネットワーク，さらには家庭外での人間関係や援助ネットワークまで主題が広がった[2)]。

しかし，先行研究の動向を総合的に把握するのは難しい。多くのレビューは，個々の学問領域の先行研究の「主要な特徴」を述べたもので，様々な学問領域の先行研究の「全体の特徴」を述べたものではない。「全体の特徴」を把握できるレビュー[3)]によれば，育児ストレス研究の課題は９つに集約・整理できる。本稿は，「規定要因の分析」という課題を念頭に，相対的影響と労働形態という２つの観点で分析を行う。心理や行為を分析の対象とする限り，ある特定の要因によって説明されることはない。特に，今日の多様化・多元化している社会状況を考慮すれば，理論的にも実証的にも，相対的影響を析出することが必然的に求められる。また，多様化・多元化する社会状況の中で，ある要因がすべての属性の人々に一様に影響すると想定できない。特に，家事や育児を含めた広義の「労働」は，私たちの生活に深く関連しているため，労働形態別の分析は欠かせない。

相対的影響の分析は，育児ストレス研究で実はほとんどない。多くの研究は，単純集計，クロス集計，相関係数による分析であるため，規定要因の分析そのものが少ない。たとえ規定要因の分析をしていても変数がわずかであるため，相対的影響を十分に分析できていない。相対的影響の分析としては，高橋ら[4)－7)]の研究など，数えるほどしかない。一方，労働形態別の分析は，一見進んでいるようにみえる。しかし，多くの研究の対象者の属性は，専業主婦[8)]，幼稚園[9)]，就労母親[10)]，保育所[11)]といった特定の労働形態に限られている。仮に労働形態別[12)13)]もしくは幼稚園・保育所[14)－16)]の比較がなされていても，相対的影響の分析がなく，労働形態間の要因の異同がわからない。そのため，本稿では，相対的影響を分析できる重回帰分析を用い，労働形態による多母集団比較を行う。

従来の育児ストレスの調査で組み込まれてきた変数のほとんどは，大別して，心理レベルと支援レベルの変数である。しかし，虐待などの「育児問題」を解明することが求められる近年，子どもへの関わりとストレス反応の関連性の分析は極めて重要である。近年，育児ストレスと育児行動の関連性を分析した研究[17)]や育児ストレスと虐待行為の関連性を分析した研究[18)]などがある。育児行動を育児ストレス反応の要因として分析した論考[19)]はまれである。これまでの育児ストレス研究では，育児にとってのまさしく土台である「子どもとの関わり」が抜け落ちていた。そのため，本稿では，育児行動との関連でストレスの要因分析を行うものとする。

Ⅱ 方　　法

（１） 調査概要

実施時期は2007年11～12月であった。調査対象は，福岡県下の公式ホームページをもとに，幼稚園や保育所などの一覧を作成し，無作為に抽出した施設や団体に電話で調査協力をお願いし，承諾を得た施設や団体あてに調査票を送付した。送付数は，幼稚園８カ園，保育所13カ所，

子育てサークル２団体。1,911部を配布し，1,219部を回収（回収率63.8％），うち有効回答数は1,156部（有効回答率60.5％）であった。本稿で分析対象とした母親のみ（Ｎ＝1,125）の属性の割合は**表１**に示したとおりである。

なお，調査対象者への倫理的配慮として，調査の趣旨を述べたうえで，調査への回答は任意であり，回答内容は統計的に処理されるため，個人を特定することはなく，個人情報は適切に管理される旨を調査票に明記した。

調査項目は，先行研究で混在したものを整理して構成した。そのため，この調査は，特定の理論モデルに依拠する方法（微分的方法）を取らず，複数の理論モデルを総合する方法（積分的方法）を取った。ただし，テーマと項目を独自の枠組みで整理することは困難であったため，ストレス研究の理論的な枠組みをまとめた田尾ら[20]の知見を参考にした。心理学の古典的なＳ－Ｒモデルに依拠する一般的なストレス調査の場合，質問項目は，ストレッサー，モデレーター，ストレス反応から成る。これに，育児ストレスの先行研究で組み込まれてきた変数の主題を組み込むと，**図１**のようになる。育児ストレスの研究では，モデレーターは組み込まれることがほとんどなく，本稿でも，ストレス反応への直接効果を分析するものとする。

表１　調査対象者の属性（Ｎ＝1,125）

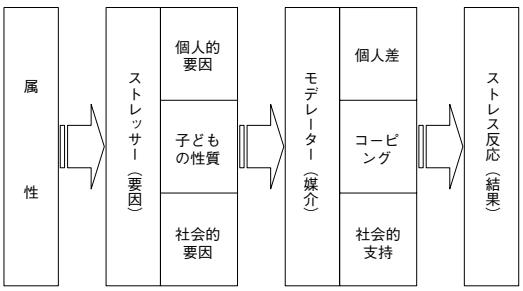
	実数	構成割合（％）
年齢層		
10代	1	0.1
20	119	10.6
30	828	73.6
40	174	15.5
50	1	0.1
NA	2	0.2
本人の職業		
会社員	159	14.1
自営業	56	5.0
公務員	14	1.2
パート	298	26.5
その他	38	3.4
主婦	554	49.2
NA	6	0.6
通園施設		
幼稚園	553	49.2
保育所	424	37.7
未通園	14	1.2
複合	116	10.3
NA	18	1.6
家族形態		
核家族	965	85.8
三世代以上	126	11.2
その他	30	2.7
NA	4	0.4
居住地域		
都市部	190	16.9
住宅地域	795	70.7
農山漁村	55	4.9
NA	85	7.6
区分		
３歳未満児	97	8.6
３歳以上児	712	63.3
両方	283	25.2
NA	33	2.9
第一子の年齢		
０歳	90	8.0
1	139	12.4
2	152	13.5
3	154	13.7
4	207	18.4
5	187	16.6
6	164	14.6
NA	32	2.8
配偶者		
あり	1 019	90.6
なし	76	6.7
NA	30	2.7
配偶者の職業		
会社員	736	65.4
自営業	158	14.0
公務員	85	7.6
パート	4	0.4
その他	36	3.2
主婦	2	0.2
NA	104	9.2

注　表中のNAは回答がなかったことを表す。

（２）　分析で使用する変数

変数の選択には，特定の理論モデルに依拠する方法と得られた結果のモデルの適合度を基準にする方法の２つがある。前者の方法は，分析モデルが明確であるが，依拠する理論モデルが限定されるため，そもそも重要な変数を組み込まず，データから得られるはずの知見を取りこぼす可能性がある[21]。一方，後者の方法は，依拠する理論モデルを絞り込まないため，分析モデルが予め明確でない代わりに，対象を総合的

図１「育児ストレス」研究のモデル



注　田尾ら[20]を参考に筆者が作成

にとらえ，データに忠実な分析モデルを選択することができる[22]。本稿の分析は，後者の方法に位置づくもので，想定可能な多くのモデルのうち，適合度の高いモデルを採用した。

本稿では，この調査に組み込まれたテーマのうち，子どもへの関心を構成する「気になる様子」，他者との関わりを構成する「子育ての環境」，子育ての認識を構成する「自尊感情」，子どもへの関わりを構成する「子育て状況」，という４つのテーマの項目を使用して「ストレス反応」への影響を分析した。子どもの「気になる様子」（２件法・20項目）は，森ら[23)－25)11)]などを参考にした。社会的援助に関わる「子育ての環境」（４件法・10項目）は，牧野ら[26)－28)7)9)]などを参考にした。育児に関わる「自尊感情」（４件法・10項目）は，佐藤ら[29)－31)14)]を参考にした。子どもへの関わりに関する「子育て状況」（４件法・20項目）は，保坂ら[32)－34)]などを参考にした。そして，「ストレス反応」（４件法・10項目）には，Maslach Burnout Inventory[35)]を参考に，バーンアウトの主要な下位項目の消耗感[36)]を組み込んだ。「気になる様子」の該当

表２－１ 「気になる様子」の該当割合と合計得点の平均値±標準偏差

	該当割合（%）
1 体の発育の遅れ	2.7
2 激しい人見知り	4.2
3 病気がち	4.9
4 落ち着きがない	16.6
5 甘えん坊	17.5
6 ちょっとした癖	17.5
7 食事の好き嫌い	22.5
8 寝つきが悪い	4.1
9 表情が乏しい	0.3
10 泣き止まない	1.2
11 読み書きが苦手	7.1
12 友達に暴力	2.2
13 荒っぽい言葉	9.9
14 皆と違うペース	5.4
15 勉強が不得意	2.1
16 悪影響の友達	1.9
17 家族と仲が悪い	0.3
18 約束を守れない	4.2
19 粘り強さに欠ける	17
20 友達からの意地悪	2.6
合計得点（平均値±標準偏差）	1.44±1.60

注　各項目の該当割合は，「よくあてはまる」と「だいたいあてはまる」を合計した割合をさす。

表２－２ 「子育て環境」「自尊感情」「子育て状況」「ストレス反応（および合計得点）」の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
子育て環境		
1 子育ての相談相手	3.46	0.65
2 ストレス発散の場	2.97	0.85
3 近所に遊びの施設	2.99	0.86
4 子育ての話し合い	3.32	0.76
5 一時的に預ける人	2.77	1.13
6 方針の対立がない	3.06	0.74
7 自分が一人で世話	2.73	0.95
8 公平に家事の負担	2.24	0.92
9 １人になれる時間	2.52	1.03
10 参考の書籍や雑誌	2.33	0.91
自尊感情		
1 子どもに必要とされている	3.80	0.42
2 出産後の体型の変化が心配	2.92	0.98
3 喜怒哀楽の感情の起伏多し	2.78	0.81
4 子どもと一緒に成長している	3.37	0.67
5 一緒の時間が少なくて残念	2.19	0.98
6 社会から孤立している気がする	1.78	0.76
7 育児に対してこだわりあり	2.21	0.72
8 子どもといて楽しめてない	1.60	0.66
9 子育てすることに自信ない	1.91	0.72
10 出産・育児でできないこと	2.10	0.81
子育て状況		
ポジティブな状況		
1 子どもが可愛くて仕方ない	3.59	0.55
2 子どものためなら自己犠牲	3.45	0.63
3 子どものほしがる物は買う	1.86	0.66
4 子どものそばにいると安心	3.38	0.66
5 子どもの将来が大変楽しみ	3.07	0.75
6 子どもの笑顔で疲れがなし	3.58	0.60
7 遊びの数を増やしている	2.56	0.76
8 子の興味や関心を知りたい	3.29	0.68
9 栄養面を考えて食事を用意	3.17	0.62
10 絵本の読み聞かせの時間	2.78	0.91
子育て状況		
ネガティブな状況		
11 仕方なく手を上げた	2.93	0.84
12 叩きたいと思った	2.57	0.96
13 厳しい言い方をした	2.91	0.91
14 傷つける言い方をした	2.74	0.94
15 食事を与えなかった	1.10	0.41
16 何もする気がなかった	2.33	1.02
17 話しかけられて無視した	1.97	0.86
18 仕事や家事で関われない	2.46	0.88
19 子どもに物を投げつけた	1.60	0.83
20 何をしても腹が立つ	1.73	0.82
ストレス反応		
1 もうやめたい	3.15	0.74
2 気配りが面倒	3.16	0.60
3 顔を見るのもいやだ	2.82	0.76
4 毎日がつまらない	3.50	0.58
5 やっと終わった	3.10	0.69
6 誰とも話したくない	2.74	0.78
7 子育てどうでもよい	2.09	0.78
8 心にゆとりがない	3.06	0.60
9 子育ては意味がない	1.90	0.73
10 心身ともに疲れ果てた	2.37	0.72
合計得点	14.37	4.31

割合と合計得点の平均値±標準偏差は**表２－１**，「子育て環境」「自尊感情」「子育て状況」「ストレス反応（および合計得点）」の平均値と標準偏差は**表２－２**のとおりである。表中の各項目の番号は，質問紙上の通し番号を表す（以下，同様）。

分析の際には，「ストレス反応」と「気になる様子」は合計得点の算出を行い，「子育ての環境」「自尊感情」「子育て状況」は主因子法による因子分析を行い，独立変数として用いることとする。なお，因子の個数には累積寄与率（50％程度），項目の削除には負荷量（0.40以上）と共通性（0.16以上），因子の解釈と命名には質問項目の内容をそれぞれ参考にした。因子の抽出後，クロンバックα係数（0.5以上）を算出し信頼性を確認した。

まず，「ストレス反応」は，「よくあてはまる」４点から「まったくあてはまらない」１点までを得点化し，全10項目の合計得点（最高が40点，最低が10点）を算出した。また，「気になる様子」は，「あてはまる」を１点，「あてはまらない」を０点として，全項目の「あてはまる」の合計得点（最高が11点，最低が１点）を算出した。さらに，「子育ての環境」「自尊感情」「子育て状況」は，因子分析を行った。「子育ての環境」では，３つの因子が抽出でき，第１因子を「良好な環境」（α＝0.707），第２因子を「１人の時間」（α＝0.665），第３因子を「公平な分担」（α＝0.633）とした（**表３**）。「自尊感情」では，２つの因子が抽出でき，第１因子を「閉塞感」（α＝0.723），第２因子を「疎遠感」（α＝0.684）とした（**表４**）。「子育て状況」では，４つの因子が抽出でき，第１因子を「暴力を表出」（α＝0.810），第２因子を「存在を受容」（α＝0.780），第３因子を「尊厳を無視」（α＝0.729），第４因子を「手間を歓迎」（α＝0.619）とした（**表５**）。

表３　「子育て環境」の因子分析

	良好な環境	１人の時間	公平な分担	共通性
4　子育ての話し合い	0.633	0.135	0.285	0.500
1　子育ての相談相手	0.598	0.237	0.125	0.429
2　ストレス発散の場	0.546	0.533	0.129	0.599
3　近所に遊びの施設	0.432	0.106	0.030	0.199
6　方針の対立がない	0.413	0.093	0.142	0.200
9　１人になれる時間	0.132	0.794	0.076	0.654
7　自分が１人で世話	−0.119	−0.085	−0.712	0.528
8　公平に家事の負担	0.197	0.146	0.595	0.414
5　一時的に預ける人	0.309	0.234	0.207	0.193
10　参考の書籍や雑誌	0.155	0.285	0.119	0.120
固有値	3.249	1.174	1.040	5.463
因子寄与率（％）	32.49	11.74	10.40	54.63

表４　「自尊感情」の因子分析

	閉塞感	疎遠感	共通性
9　子育てすることに自信ない	0.505	0.448	0.456
6　社会から孤立している気が	0.474	0.227	0.277
3　喜怒哀楽の感情の起伏多し	0.450	−0.035	0.204
10　出産・育児でできないこと	0.439	0.290	0.276
8　子どもといて楽しめてない	0.429	0.559	0.497
2　出産後の体型の変化が心配	0.371	−0.165	0.165
5　一緒の時間が少なくて残念	0.031	−0.007	0.251
1　子どもに必要とされている	−0.004	−0.414	0.171
4　子どもと一緒に成長している	0.034	−0.496	0.248
固有値	2.394	1.328	3.722
因子寄与率（％）	29.93	16.60	46.53

表５　「子育て状況」の因子分析

	暴力を表出	存在を受容	尊厳を無視	手間を歓迎	共通性
13　厳しい言い方をした	0.851	0.006	0.230	0.064	0.782
14　傷つける言い方をした	0.780	−0.055	0.303	−0.003	0.702
11　仕方なく手を上げた	0.566	0.020	0.163	−0.016	0.347
12　叩きたいと思った	0.519	−0.082	0.304	−0.087	0.376
1　子どもが可愛くて仕方ない	−0.066	0.705	−0.149	0.126	0.540
4　子どものそばにいると安心	−0.062	0.688	−0.089	0.201	0.526
6　子どもの笑顔で疲れがなし	−0.017	0.621	−0.068	0.253	0.455
2　子どものためなら自己犠牲	0.049	0.547	−0.091	0.164	0.336
5　子どもの将来が大変楽しみ	−0.073	0.501	−0.109	0.326	0.375
17　話しかけられて無視した	0.248	−0.124	0.646	−0.060	0.498
20　何をしても腹が立つ	0.331	−0.136	0.557	−0.095	0.447
16　何もする気がなかった	0.278	−0.076	0.549	−0.053	0.388
19　子どもに物を投げつけた	0.303	−0.102	0.464	−0.144	0.338
18　仕事や家事で関われない	0.115	−0.012	0.432	−0.070	0.205
7　遊びの数を増やしている	−0.148	0.263	−0.106	0.564	0.421
8　子の興味や関心を知りたい	−0.034	0.365	−0.041	0.545	0.433
10　絵本の読み聞かせの時間	−0.018	0.103	−0.075	0.358	0.145
9　栄養面を考えて食事を用意	0.079	0.131	−0.061	0.332	0.137
15　食事を与えなかった	0.025	−0.091	0.373	−0.052	0.151
固有値	4.711	2.873	1.226	1.145	9.955
因子寄与率（％）	24.80	15.12	6.45	6.03	52.40

Ⅲ　結　　果

多母集団同時分析は，群ごとの相対的影響を明らかにするには有効だが，従属変数の高低差が明らかにならない。そこで，多母集団同時分析に先だって，分析対象をフルタイム20.5％（ｎ＝229），パートタイム30.0％（ｎ＝336），専業主

表６　労働形態３群による分散分析

		フルタイム	パートタイム	専業主婦
気になる様子（合計得点）		1.33±0.11	1.63±0.09	1.36±0.07
		n.s.	*	
		n.s.		
子育ての環境	良好な環境	-0.06±0.05	0.02±0.05	0.01±0.03
		n.s.	n.s.	
		n.s.		
	１人の時間	-0.15±0.06	0.04±0.05	0.03±0.04
		*	n.s.	
		*		
	公平な分担	0.35±0.05	0.02±0.04	-0.15±0.03
		***	**	
		***		
自尊感情	閉塞感	-0.16±0.05	-0.09±0.04	0.11±0.03
		n.s.	***	
		***		
	疎遠感	-0.02±0.05	-0.07±0.04	0.05±0.03
		n.s.	n.s.	
		n.s.		
子育て状況	暴力を表出	-0.34±0.06	0.07±0.05	0.09±0.04
		***	n.s.	
		***		
	存在を受容	0.05±0.05	0.10±0.05	-0.07±0.04
		n.s.	*	
		n.s.		
	尊厳を無視	0.01±0.05	-0.01±0.04	-0.00±0.04
		n.s.	n.s.	
		n.s.		
	手間を歓迎	0.01±0.05	-0.03±0.04	0.02±0.03
		n.s.	n.s.	
		n.s.		
ストレス反応（合計得点）		14.04±0.28	13.94±0.23	14.74±0.18
		n.s.	*	
		n.s.		

注　１　*は，有意確率を表す（* p <0.05，** p <0.01，*** p <0.001）。
　　２　n.s.は，２群間での有意な差がみられないことを表す。

表７　ストレス反応（合計得点）への影響

	全体（n =1,118）		フルタイム（n =228）		パートタイム（n =336）		専業主婦（n =554）	
	β	p	β	p	β	p	β	p
気になる様子	0.094	***	0.138	**	0.116	**	0.093	**
良好な環境	-0.090	***	…		…		-0.133	***
１人の時間	-0.102	***	…		-0.107	*	-0.120	***
公平な分担								
閉塞感	0.209	***	0.145	**	0.161	**	0.258	***
疎遠感	0.136	***	0.125	*	0.232	***	0.084	*
暴力を表出	0.090	***	0.120	*	0.139	**	…	
存在を受容	-0.161	***	-0.166	**	-0.170	***	-0.163	***
尊厳を無視	0.308	***	0.424	***	0.256	***	0.317	***
手間を歓迎								
ΔＲ２	0.461		0.459		0.437		0.478	

注　1）　βは標準化係数，*は有意確率を表す（* p <0.05，** p <0.01，*** p <0.001）。
　　2）　ΔＲ２は，採用したモデルの適合度を表している。どの値も比較的高く，分析結果の説明が妥当であることを意味する。
　　3）　ステップワイズ法を用いているので，統計的に有意な結果が得られなかった項目は…とした。

婦49.5％（ｎ＝554）という３群に分け，投入する変数（合計得点あるいは因子得点）の高低差を分析した。投入する変数（合計得点あるいは因子得点）を従属変数に，分散分析およびTukey 法による多重比較を行った（**表６**）。本稿の目的でないため，これらの分析結果の詳細な記述は避け，多母集団同時分析の従属変数となる「ストレス反応（合計得点）」に着目する。平均値は，フルタイム（14.04±0.28），パートタイム（13.94±0.23），専業主婦（14.70±0.18）であり，フルタイム群と専業主婦群との間でストレス反応（合計得点）に有意な差があることがわかった（F (2,1115)＝4.40，p <0.05）。

さて，多母集団同時分析の結果は，**表７**に示したとおりである。モデルは，ケースの全体を分析したものと，フルタイム労働，パートタイム労働，専業主婦の３群それぞれで分析したものである。

全体のモデルをみると，全体の特徴として，どの変数も，「ストレス反応」に対して統計的に極めて有意な影響が認められた（p <0.001）。特に，「尊厳を無視」（β＝0.308），「閉塞感」（β＝0.209），「存在を受容」（β＝－0.161）は，他の変数と比べて相対的に強い影響が認められた。

しかし，労働形態別の分析をすると，全体のモデルとは異なる傾向が読みとれた。まず，フルタイムでは，「尊厳を無視」（β＝0.424，p <0.001），「存在を受容」（β＝－0.166，p <0.01），「閉塞感」（β＝0.145，p <0.01）であった。つぎに，パートタイムでは，「尊厳を無視」（β＝0.256，p <0.001），「疎遠感」（β＝0.232，p <0.001），「存在を受容」（β＝－0.170，p <0.001）であった。そして，専業主婦では，「尊厳を無視」（β＝0.317，p <0.001），「閉塞感」（β＝0.258，p <

0.001),「存在を受容」($\beta = -0.163$, $p < 0.001$）であった。

Ⅳ 考　　察

（１） 本稿の分析結果のまとめ

労働形態で分けずに分析した場合，投入後に残された変数は，どれも統計的に極めて有意な影響が認められた。特に，「尊厳を無視」「閉塞感」「存在を受容」という３つの変数は，ストレス反応への相対的な影響が強いことがわかった。ただし，これは全体の特徴であって，育児のストレス反応の規定要因は，労働形態間で共通点と相違点があることがわかった。

まず，すべての労働形態の共通点に着目する。「ストレス反応」に対して，すべての労働形態で共通する規定要因は，「気になる様子」「閉塞感」「疎遠感」「存在を受容」「尊厳を無視」という５つの変数となった。つぎに，労働形態間での相違点に着目する。最も影響の強い「尊厳を無視」に続く変数は，フルタイムでは「存在を受容」，パートタイムでは「疎遠感」，専業主婦では「閉塞感」となった。

今回の分析では，さらに複雑な分析結果が得られ「暴力を表出」は，フルタイムとパートタイムで，「１人の時間」はパートタイムと専業主婦で，「良好な環境」は専業主婦のみで，それぞれ有意な影響がみられた。

（２） 育児行動との関連性

多くの先行研究では，性格特性や自尊感情，あるいは子どもの様子や特性といった心理レベルの変数が組み込まれてきた。また，近年の先行研究では，社会関係への関心から，夫婦間の役割分担，家族を取り巻く人々，子育てサークルや関係機関など，支援レベルの変数が組み込まれてきた。しかし，こうした研究では，虐待などの「育児問題」を解明できない。そのため，近年，育児のストレス反応と育児行動の関連性の分析が，一部の研究[17)－19)]で行われている。本稿でも，心理レベルや支援レベルの変数だけでなく，行動レベルの変数を組み込んで分析した。その結果，ストレス反応に対して，「尊厳を無視」が正の強い影響をもち，「存在を受容」が負の強い影響をもつことがわかった。行動レベルの変数は，心理レベルの変数や支援レベルの変数と同等かそれ以上に，ストレス反応に対して相対的に強い影響をもつのである。

（３） 労働形態別の相対的影響

つぎに，分析結果から，労働形態別の相対的影響は複雑であることがわかった。①何らかの賃労働を行っているフルタイムやパートタイムの場合，「暴力の表出」をする女性保護者ほどストレス反応が現われやすい。②フルタイムで労働をしていないパートタイムや専業主婦の場合，子どもと離れた「１人の時間」がない女性保護者ほどストレス反応が現われやすい。③家庭外での賃労働を行っていない専業主婦の場合，社会的なサポートのある「良好な環境」がないほど，ストレス反応が現われやすい。従来の育児ストレス研究では，特定の労働形態の女性保護者を対象とするため，労働形態による比較分析は少ない。多様な育児ストレスの計量的研究の中でも，労働形態別の分析で，なおかつ相対的影響の分析を行った先行研究は，八幡[37)]と尾形ら[38)]のたった２つである。ところが，八幡らの分析結果では，従属変数に対する独立変数の影響はそれほど有意ではなく，また，尾形らの分析手法では，「共働き家庭」と「専業主婦」の２群である。これらの先行研究では，本稿のような労働形態別の複雑な規定要因は分析できていない。今後，育児ストレスの要因分析では，労働形態別の複雑な相対的影響を丹念に分析する必要性があることが示唆される。

Ⅴ 結　　語

育児ストレスを分析する場合，すべての属性を対象にする方法は，臨床的な研究として重要である[39)]。しかし，もう一方で，複雑な要因分析は，育児ストレス研究における重要な課題である。本稿の分析結果は，すべての労働形態に共通する「全体の影響」，労働形態で別々の

「個別の影響」，そして，賃労働のあり方による複雑な影響があることを示している。このように，労働形態と要因が複雑に関連するため，育児ストレスを理解することは容易ではない。

しかも，労働形態は，経済階層や文化階層と関連が深い。心理の領域と考えられがちな「ストレス」という変数が「階層性」と関連することを示唆している。この場合，乳幼児をもつ女性保護者の「階層性」は，垂直な序列といった単純な階層ではなく，ある部分で他の労働形態と共通しながら，全体として独特の影響を受けている。育児と社会構造との関連性の分析は理論上の課題として指摘され[40]，近年，いくつかの実証研究[41]もある。本稿の分析結果は，ほんのわずかな知見であるが，こうした基礎的な資料によって，育児ストレスの複雑さや社会構造との関連性を理解し，具体的なデータに基づく改善策の議論が可能となるだろう。

文　献

1）井上眞理子．ファミリー・バイオレンス．家族論を学ぶ人のために．1999；京都：世界思想社，178-91.

2）山根真理．育児不安と家族の危機．家族問題－危機と存続．京都：ミネルヴァ書房，2000；21-40.

3）池田隆英．日本の「育児不安」に関する計量的研究の動向と課題．精華女子短期大学研究紀要 2009；35：25-52.

4）高橋有里．乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因．岩手県立大学看護学部紀要 2007；vol.9：31-43.

5）桑名佳代子，細川徹．１歳６ヶ月児をもつ親の育児ストレス(１)－母親の育児ストレスと関連要因．東北大学大学院教育学研究科研究年報 2007；56(１)：247-63.

6）川井尚，庄司順一，千賀悠子，他．育児不安に関する臨床的研究３－育児困難感のアセスメント作成の試み．日本総合愛育研究所紀要 1997；33：35-56.

7）田中昭夫．幼児を保育する母親の育児不安に関する研究．乳幼児教育学研究 1997；6：57-64.

8）佐々木保行，佐々木宏子，中村悦子．乳幼児をもつ専業主婦の育児疲労（１報）．宇都宮大学教育学部紀要 1979；29(１)：21-43.

9）荒牧美佐子，田村毅．育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル，サポートの規定要因：幼稚園児を持つ母親の場合．東京学芸大学紀要．第６部門（技術，家政，環境教育） 2003；55：83-93.

10）平岡康子，松浦和代，野村紀子．乳幼児をもつ就労女性の育児ストレスと職業性ストレスの分析．小児保健研究 2004；63(６)：647-52.

11）間三千夫，関根剛，室みどり．児の年齢階層別に見た母親の育児不安．和歌山信愛女子短期大学，信愛紀要 2000；40：41-8.

12）山岡テイ．働く母親の育児不安－就労状況，活動状況や支援環境を中心にして．産業カウンセリング研究 2002；5(１)：1-9.

13）八重樫牧子，小河孝則．母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究．川崎医療福祉学会誌 2002；12(２)：219-39.

14）佐藤達哉，菅原ますみ，戸田まり，他．育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連．心理學研究 1994；64(６)：409-16.

15）川井尚，庄司順一，千賀悠子，他．育児不安に関する臨床的研究－幼児の母親を対象に．日本総合愛育研究所紀要 1995；31：27-43.

16）海老原亜弥，秦野悦子．保育園，幼稚園児を育てる母親の育児負担感－ストレッサー，コーピング，ソーシャル・サポートの関係．小児保健研究 2004；63(６)：660-6.

17）奥石薫．育児不安の発生機序と対処方略．東京：風間書房，2005.

18）中谷奈美子，中谷素之．母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響．発達心理学研究 2006；17(２)：148-58.

19）八重樫牧子，小河孝則，田口豊郁，他．乳幼児を持つ母親の子育て不安に影響を与える要因－子育て不安と児童虐待の関連性．厚生の指標 2008；55(13)：1-9.

20）田尾雅夫，久保真人．バーンアウトの理論と実際－心理学的アプローチ．東京：誠信書房，1996.

21）古谷野亘．数学が苦手な人のための多変量解析ガイド．東京：川島書店，1998.

22）美添泰人．探索的データ解析法の考え方．エスト

レーラ　1999；65：2-8.
23）森ウメ子．幼児期の子育てにかかわる母親の意識と子どもの健康状態との関連性．看護技術　1995；597：98-104.
24）佐藤祥子，片岡千雅子，佐藤喜根子，他．妊産褥婦における不安の変化：STAIを使用して．東北大学医療技術短期大学部紀要　1996；5（２）：115-20.
25）島田三恵子，渡辺尚子，神谷整子，他．産後1か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査：初経産別，職業の有無による検討．小児保健研究　2001；60（５）：671-9.
26）牧野カツコ．乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞．家庭教育研究所紀要　1982；no.3：34-56.
27）本村汎，礒田朋子，内田昌江．育児不安の社会的考察．大阪市立大学生活科学部紀要（分冊５・社会福祉学）　1985；33：231-43.
28）石橋君子，大坪智美，正崎仁恵，他．夫婦の意識が相互の育児不安に及ぼす影響．母性衛生　2002；43（４）：541-8.
29）中西雪夫．乳幼児をもつ母親の性格と育児不安．佐賀大学教育学部・研究論文集　1996；43（２）：113-9.
30）坂間伊津美．乳幼児を持つ母親の心理的問題と疲労：阿見町調査から．茨城県立医療大学紀要　2000；5：99-108.
31）間三千夫，筒井孝子，中嶋和夫．母親の育児ストレス，コーピングと精神的健康の関係．和歌山信愛女子短期大学・信愛紀要　2002；42：54-8.
32）保坂渉．虐待－沈黙を破った母親たち．東京：岩波書店，1999.
33）恩賜財団母子愛育会日本子ども家庭総合研究所編．子ども虐待対応の手引き．東京：有斐閣，2005.
34）徳永雅子．子ども虐待の予防とネットワーク－親子の支援と対応の手引き．東京：中央法規，2007.
35）Maslach C, Jackson SE, Leiter MP, Maslach Burnout Inventory Manual（3rd. edition）, 1996, Consulting Psychologists Press.
36）Schaufeli, W. B., Maslach, C., & Marek, T.（eds.）, Professional Burnout: Recent Developments in Theory and Research, 1993, Taylor & Francis.
37）八幡裕一郎，畑栄一，佐藤千枝子，他．育児不安に関する要因の検討．日本公衆衛生雑誌　1999；46（７）：521-31.
38）尾形和男，宮下一博．母親の養育行動に及ぼす要因の検討：父親の協力的関わりに基づく夫婦関係，母親のストレスを中心にして．千葉大学教育学部研究紀要　2003；51：5-15.
39）吉田弘道，山中龍宏，巷野　悟郎．育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究．小児保健研究．1999，58（６），697-704.
40）橋本健二．現代日本の階級構造－理論・方法・計量分析．東京：東信堂，1999.
41）片岡栄美．子どものしつけ・教育戦略の社会学的研究（研究代表者：片岡栄美，平成17年度－平成19年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｂ）研究成果報告書）．2008.